



仇話七部集

巻みの

三

5
4406
3



門へ 5
號 4406
卷 3



音其角序

能備乃集つる事古今



わたりて道れおまへ起通
き時たれや幻術の事一也
しそろれ白り魂を入さ道
とゆえんは格あまに似る
海一久一々世よまらり
まく人ようりて不愛れま

昭和九年
九月二日
勝末

を志し五徳ハソノ事乃至
此心をもつて此道も亦一に
こたはり彼あり上人の骨
てんを作つて一神の神
多る笛を吹やうになん結
とりて神なる人よ成て結
此を五の神の事結さぬは
及魂乃法れをあらうこのよ傳ふ

屋内まゝしたまりるれ入る
しアイウエソよりひきま
いづれん吟神もあめ道
一しか歌譜も魂れ入る神
よころとて我翁行脚乃る
伊加越一も山の中も
後一小養を看せし歌譜
乃神を入るまゝ今我をた

ちまら新腸たむきんを呼
ふも神あはに懼る人まは
術たりし我をえりしは
集をつくもしは様そのい名
付しは建ちる是く序まら
れんりしり魂を合せし去来
元兆乃ほ一也りたのよまら
書

猿蓑集卷之一

冬

初し我猿を小蓑をほしゆ也 芭蕉
あまのけをほるまの夜其神の 其角
時ふもや並いしもの新しき 千那
幾人しし我のぬぐおの代橋 僧 丈州
鏡持の形振らるししは 膳所 正秀
廣はやししり対ふる沼を 史邦

舟人のあはれきりし時ふれ 尚白

伊賀の境よき

かろくや奈良の隣乃一時面 曾良

時ふれや早本ついで実あり 凡兆

ふりて竹田の里や坊し我 乙刃

多きまされ一早の光や小夜時毎 羽紅

新田の稗穀怪しき事 昌房

いづれや沖の河ふれ志帆片帆 去来

とらねよけや北平れ早のあ 百歳

いづれも動く地なきをねおれ 野水

後よ

くろくもくはくし船の中 其角

歸るれうれよる志ん途切し 同

禅もれ雲のふらふや神守月 凡兆

百舌もろのわろおちれ松よ十月 嵐蘭

こけくや頬腫痛む人の影 芭蕉

伊賀

膳所

大津

かよひの心延きけりとのをよまき 凡兆

たのしみ

掉麻のこまありぬる枯ゆきれ 伊賀 土世方

流梯をたもめて過す十夜外 膳所 裾道

ちやのこぬやいづ人あまを女 伊賀 越人

まのむほ茶のふゆよねきり 猿錐

古ちれ貴子も妻りしをりまゑ 凡兆

公羽の雲田よ家始をいひ

雑水のかきこりなげくハ冬こもり 其角

こ乃ききと牡丹のいぬんまの裸 伊賀 車来

草津

あひまをさひらうまのこのうれ 尚白

神逆水にきまらうるほら鈴 珠碩

霜月朔旦

揺るるりふよ物あし 赤拍 伊賀 良品

水を月れあを粧しや水仙も 羽后田 不玉

今八世なるのしき一もや冬の時

尾張 貝葉

尾張のころのころのころのころ

去来

一、後くさむさもあや鉛千等

伊賀 探丸

さしつゝいふ又賀村のころ

尚白

茶湯さつさつさつさつさつ

江戸 龜翁

炭竈さるも負れ枝の倒き

九兆

住つらぬ様のもろや平也火燧

芭蕉

寝ころや火燧蒲團のころ

其角

内前此小の歌もあるゆ冬至哉

九兆

本兔やゆきもいぢる登れ雨

尾張 苺境

さつさつ八眠のやゆきもさるり

伊賀 半残

負交

まーりらるゝ孩子れ切を譲り

丈艸

浦風や巴をさるりすし

曾良

あゝ様やいふと刻もる友衛

去来

狼のあゝ踏消すや濱千鳥

史邦

五

背門に乃入心よのほるちるれ 文州
 いしきつ雪よまよきて鳴千尋 千那
 矢田のゆや浦のあらけ鳴ちる 元北
 筏さけんくさ跡や鴛鴦のち 本節
 水底をさへてまゝ魚の小鴨か 文州
 ちんちんも寝たをわらふ余吾の海 路通
 死まへ採成せん鷹はくか 旦蒙
 襟をさへり首引入る冬れ月 秋風

元本戸也鎖のきれて冬れ月 其角
 かうちりれ蒲團をさへりやみゆの環 長崎 暮年
 又やのさへん旅人さへり 大津尼 智月
翁の御れかきも衣をとあそ
らるる説あり略く
 首出してさへり雪をさへり 義濃 竹戸
 題竹戸之衣 也林
 五つめハ我のまけあしき紙衣 曾良
 魚のけ棒乃やもせがさ秋分 探丸

志のつとみ 教珠の玉の守 網袋の 史州

海白砂を候す

膝つとよ 妙しとまり 古き 霰のれ 史邦

桜櫛の 簾れ 教よ 狂ふあり 野童

鶺鴒乃 橋より ちとほす 霰散るれ 伊賀 示蜂

呼ふと 射賣るん ぬあられ 凡兆

こころ 津より ち朝飯の 出まは 膳所 晝好

とら ちち 肉は 居はれ 人へ 傳 其角

初音よ 響 都座の うく 新朗 史邦

ちね ちげの む 風 吹く ち 音 情 羽紅

ち ちち ち 凡 丸 粒の ち 響 ち ち 探丸

下京 ち ち ち ち ち ち ち ち 夜 たる 凡兆

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 同

信濃 路を ち ち ち ち ち 同

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 芭蕉

草庵の 留り ち ち ち ち ち

表老の髪もあけと巻れ其角

高れ目ハ竹の子筍うはさりたる 尾張 羽立

汗もも健あつハ舌結しん 長崎 卯七

いりりてちや舌咬つて 去来

青亜追悼

乳のこりに世を海も蹄 尚白

うゝ舞もそ也の慶も色れ内 芭蕉

餅と記懐ハ顔は似ぬ 乙卯

一月の夢よ来りて 又州

住吉奉納

夜神糸や鼻息白一面の内 其角

節季候よ又の心 伊賀 須琢

あぐやうら 同 祐甫

乙卯、新巻

くの家を 芭蕉

弱法師 其角

歳之夜や曾祖文をゆげふ多枕 長和
 へす望れしうらなひの香 去来
 らきてけふ事始まうけや伊勢の 同
 大とやまはまを結ぶ人とも 羽紅
 やらうねく又やまのくさの義の層 其角
 い福のくさくさくさくさくさく 路通
 年のくさくさくさくさくさく 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面みくさくさくさく 其角
 らくさくさくさくさくさく 木高
 ねくさくさくさくさくさく 芭蕉
 けくさくさくさくさくさく 尚白
 けくさくさくさくさくさく 凡兆
 しくさくさくさくさくさく 智月

翁は侍られてすまふ

亡人

似合しよけのこまはあま

杜國

あまのまはけのま

嵐園

井たすゑはく清し杜の

半残

起すくおのまは

朝の回乃

起くのまはけのま

仙化

題去来之塔峨洛柿舎

巨極の初の本魚屋を名は

元祖

破垣やわし麻子たがひ道 曾良

南都旅店

誰のまはけのまはけ乃園此桐 千那

洗濯やまはけのまはけのま

尾張

薄定

豊國よ

竹の子たかをたけまはけのま

元祖

あけけし子や白濁りし

去来

たけのこや稚まはけのま

芭蕉

猪ノ吹入とくくろくろく
正秀

明石夜泊

晴きやしうれよき夜は月
芭蕉
君の代も御座るを鍋一つ
越人

五月三日

しんがしんがしんがしんが

石の音とまぐろの音
其角
粽はふかしのふかしの
芭蕉
隈藻の廣きふかしの
餅粽
岩翁

さしきたる客人やとよまらり哉
尚白

五月六日大坂より死の
遠忌を吊しゆく

大坂や刀ぬき死なふに
蝉吟

作賀

奥羽高館にて

箕草や兵九つゆえん乃跡
芭蕉
遠出よあひ屋の下に
蟻の跡
同

け境いひしるるありしんがしんが
こころ事しんが

かこつり角やりしんが
石
同

五月あゝ家あり捨てあり
元北

しほ妻れ味なきやあり
木節

るとの謂はれありさつと雨
史邦

奥羽名取の郡よとく申ゆまの
の塚はらくくよとく居ゆまの

道より一里まらりたり乃方
笠ゆまのつゆまよまの

ありつゆまの五りゆまの
ありつゆまの

笠ゆまのつゆまの道
芭蕉

大和紀傳のさくいそあり
て往東の形れそそあり

すめたり六粒はつと
紙のつとに書つてあり

つとりのつとあり
去来

髪剃や一夜今情あり
元北

目の道や羨れくさ月あり
芭蕉

持ゆまのつとあり
羽紅

七十余の老醫ふまあり
斗ふたことありてなり
にいふのむをけるるれを醫
いせりありつゆまの
る人はありつゆまの
ありつゆまの

けしき年よとてしつとて
ゆのさしりたりとて

六月の力や五月あえ 其角

百神も妻よ取つく茶摘可 去来

志くもや茶山よはまぬつれ 正秀

つみ合ふたけけや妻島 游力

孫と愛し

妻を余れ家しとやらん雨蛙 智月

妻をよみて鯉道かきよしや水部 花紅

志く川の関とて

月流のくもや奥け田挿う 芭蕉

出羽のさきとて

眉掃をよ面影よしとね粉のよ 同

法隆寺南帳
南無佛の志子を拜す

衣袴れくまはるくね粉のよ 千那

田の畝れ直つらひり 伊賀 万手

膳所曲水之樓とて

螢火也吹とくはまてし場のかき 去来

夢田乃螢ん二句

闇の夜や子を泣かす螢の光 九兆

けしきも船歌酔へておのづか 芭蕉

之熱野へ清きもの時

螢火やこゝろうろくま八鬼尾谷 田上尼

あけらしは霧とてさあめぬ 尚白

草むしや百合の中こゝろの虫 半残

病後

おつらやのしらふつとく百合の花 何処

すけやあふりしはる百合の花 乙羽

残蚊辞を作す

子やあふん其子の母を蚊の咬む 嵐蘭

饑別

たさとすや蚊屋もくまぬ蚊の音 膳所 里東

うきうきとあふれし
糸雲するは春よくれし

介、く、夜と昔の冠者よる所哉 其角

降ぬや雲の空くは耳乃穴 文州

下等や地中たうくは蟬の形 嵐雪

客よりや指をかけた野の勢 探志

形、死ぬるまゝのまゝの野の形 色蕉

表とや音麻州のまゝのまゝ 槐市

渡りぬく藤の花のうら流哉 元兆

舟引の妻れ唱奇、合歡の花 千那

白雪や鐘よりしる日れ夕 史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一枝の拾りてま 嵐蘭

日燈田や時くつゝ鳴く蛙 乙卯

日乃日者と鹽の池に蟻ツシカくれ 元兆

水を月の鼻つとよめく殺きを 因心

日の曇やこゝれと異と牛村台 正秀

ふく異り蘇よるは後の鳥 木節

猿蓑集卷之三

妹

花風や蓮おちるよ花

不知
讀人

此句東氏より

素堂

芭蕉屋より何よおれや妹の風

秋風

人よ似く接のまを細袂のせ

路通

珠碩

珠碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯のきくやまのふ 曾良

芳原や踏鳥の寝ぬおをねの風 江戸 山門

あまのや中野合留れ枯のふ 九北

く川露や物の外芝の起あり 去来

大比叡やしほおのまのま 野童

と海らりて踏ふおれまや和の苗 九北

文日や六りもたの夜よ似す 芭蕉

合歡の本代なうらふ 同

七夕やあまのいづく 伊賀小舟 杜若

こやいづの信より 伊賀 去来

朝のほろ 伊賀 風姿

あまの 膳所 及肩

あまの 嵐蘭

あまの 秋風

あまの 千那

まゝの如く湖のあまや姫殿の
史邦

そよぐち藪の田より卯あじ
豊稔

枯月やよりの三つ入るくま
子尹

迷ひ子の歌のころや下り東
羽紅

ハ瀬おりに遊みして業
の文ちけの序りあま
まきく楊乃先代殿の如
凡兆

ふらふらおせにらて
去来

草刈ふらけら思ひ三枝の末路
李日

え禄二年公頼又伏せしき
とちのくまの三越後より
り柳くまのかの國にて
まかりゆりていせきとえ
遊るも
曾良

いつくまたられ跡も秋の東
色蕉

桐のまにらくつづの癖の用
凡兆

百舌鳥あぐや入るくま女松系
落梧

初層より然るれまらるも
落梧

望田より

痛属れ後さむはあて瘡

芭蕉

海との舟を小海老よりの

同

加賀の小事と云ふ又多田乃
神社の宝物と云ふ
うきうき草乃りうきうき
錦のふれをささすな
うきうきあてり懐くはゆえ

心さんや甲のふれきりくす

芭蕉

葉白也二をよれ申の虫

尚白

とておのや習ふまの夜月よ

風姿

葉月や名鶴よ海人さるん

亡人
千子

こころ月に蓋のあつ紙をくり

之道

葉釋と月を成ありぬらつ月

半残

月さんせん休見の鶴乃於郭

去来

公羽を茅舎よおりて

伊賀

ねもころり松笠のふり月夜

土北方

加茂よ詣ては涙の如き

あつきのやうにわが涙は

月詠や拍手もろく膝の上 史邦

友達の六條はわらわりの

影やトたきつる朝月夜 卓袋

しやんややあしうけの月詠 乙羽

京筑紫をすれ月と信申る 丈艸

明の相もやうな月一も 凡地

ぬりしつゝしよあらぬ月の夜 高白

向の能くちの月詠をきかれ 曾良

え禄二年つゝは此傳り
月をくくくし氣比の明神よ
物もりくくの右側を

月詠一むむのしよみ乃と 芭蕉

仲殊の望室猶子を遠藤

うら夜の月もあまなりを遠送 去来

明月やせむと寺は茶はあらし 昌房

膳所

月入るる人の破さうり

羽紅

僧正のいそよの小屋れをぬかし

尚白

新瀬や鳴つのはの龜弁

元兆

一戸や衣もやうこそし人

去來

釋の籠へる迹し

越人

漕槽やわづらの喰子荒島

正秀

あやまらけきこうせいの彌ふ

嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音しりたりし葉しや

元兆

しつしき拍子のんそり

曾良

旅枕の屏のつとを軒下

千里

鳩やう流梅の齋麦島

珠碩

とちやうさやうや縁のん

元兆

鑄釣ひのるし籠つり

半残

わあ間のいすゆりなう

尚白

茶を切る跡まうり

其角

うさぎに鶉ヒナの留ヒもさくらんぼ 珠碩

このらみのやうにさくらんぼの秋 土芳

稲うらぐ母よ出逢ぬうらぐら 凡兆

自題落柿舎

将ぬら竹さくらさくらと 去来

志しはゆかゆかゆか橋のしるえさ 塵生

肌とし竹切しのすす五葉 凡兆

神田家

まはらうらうらそのあまのこ

神田家の鼓うらう音 整足

あまのこ ありあけ

さくらんぼ大なるをさくらんぼ 嵐雪

しずかの日五日弱さすまが 丈艸

まはらうらうらやうらら 凡兆

世の中、鶉ヒナの屋乃ら 同

培奥れ齒よこさうらやの音 荷分

猿蓑集卷之四

春

梅咲てく分想乃悔もあり

雨露沾

上臈の山莊よりゆく候

梅も春や山路稱入るかな

去来

しん香や久入累半の角

句空

庭真

梅も春や山路稱入るかな

土芳

しら隙を穿ちてささるる梅のふ 半残

梅の香や酒のしほめは 膳所 蟬角

しほのちやげ一筋を路のし 其角

子良鼓のほよ梅も 其角

法子良子れ一とく 色焦

瘦女敷や作りに 千那

仄捨て白梅 元北

日當り此梅 膳所 支絃

暗香浮動月黄昏

入洞の梅 風妻

武 残亭の

寝 乙刃

辛末の... 梅の... 青窓... 其角

よきしきまゝにて候しけしき
もて人かゝりて候しきまゝにて

夢さして又一句のやまほしめ
嵐蘭

百八のしめてはしらや圖のしめ
其角

ひらり寝の能宿らんおまひ
去来

野田や序巻のしる摘る葉
史邦

くつやちよふ漕まるる葉
嵐蘭

香たはぬよりのやめいゆ
如行

憶翁之客中

裾ひく草をよつとくん草枕
嵐雪

つとく踏身かきもあま
路通

七種や跡よく朝しらす
其角

家やと寝のしる根草
文州

しらすたわらしきまゝのふ
其角

膝よきぬらまに日あられ
同

鈴よきぬらまに日あられ
去来

鶯のち踏まらず垣植るれ
伊賀
一桐

雪やしら座一みりれ志しりく
江戸 溪石

うらりやを海あしれくし
其角

鶯や下駄の齒よつく小田代上
凡兆

雪や窓よ又ちよとすんあうく
伊賀 魚目

やめのちを柳らうりしすくさ
江戸 探丸

けし溜いもみの持へき柳れ
卜宅

坊うらとくへてくれし柳や
同 遠水

しとく川極変れよ柳くれ
尚白

青柳の志しれや鯉の住所
伊賀 一嘆

ちるけや鈴いす場乃し
同 本白

待中乃正月よいやうら月
揚水

回や歌よらて

妻よりしやうく意う橋の妻
芭蕉

うらりやうけし切時橋の意
越人

うらりなよけし移りの意
去来

雨路法どくく餘寒の當座

青いよめおのちのめ羽織の 龜翁

おのあはちりりいさむらひの 尚白

出らりや極よあまはるるもいさの 龜翁

そまも知くうらよ物あまはるの 嵐雪

曾紫のりあまはるるもあまきりの 元兆

白奥や海苔ハ下類のい合をの 其角

くのもよまはるるもは下極海苔の ^{尾張}松奉

まきもよはるるもは下極海苔の 元志

陽炎や取つてあまはるるもは下極海苔の 荷分

わけはあまはるるもは下極海苔の 百歳

うらりよはるるもは下極海苔の 土方

いよあまはるるもは下極海苔の 氷同

野るよあまはるるもは下極海苔の 元兆

うけあまはるるもは下極海苔の ^{伊賀}色蕉

いとあまはるるもは下極海苔の 配力

狗脊の庵よあまはるるもは下極海苔の 嵐雪

彼岸よりとむるも一夜二おの 路通

よのしりやちりたるりて涅槃像 野水

と花並ぬ裏ハ燕乃かうい道 九兆

をさうく今や紀のうへいあ房 伊賀 沢雉

君ぬや厚のふ草ふ花吹雪ぬ 嵐虎

うらよみて

と喜むやうり出るるさう法門 猿錘

不性と金かき起すれ君のぬ 芭蕉

考るや田舎のしれ鑑賣 史邦

くさくさのあさや軒よあ花 羽紅

泥垂や田舎水の眩つらん 史邦

蜻こころも木舞の竹や虫の糞 昌房

振翁や下座よやとまると年此雛 去来

よきゆいこすれ雛の写巻のふ 伊賀 萩子

桃柳くらりありとやをんあれ子 羽紅

うらけま境さのくぬきしり 三川 鳥巢

里人の暗居しるる田畑られ 嵐推

蝶のまじりては夜寝よきり有実の 半残

糸帯切て白根の露をの束に 桃妖

水のほりこころすしや 園風

日の影やこころれよの親すめ 珠碩

花の露もむきよのすまや縁の先 土芳

南の他や果なまこりてあけ 芭蕉

越より飛浮く如くは露の
つらみのあやしくもさかき道

あやしくもさかき道

鶯の巢の樟の枯枝よ月に入ぬ 允兆

うすくもさかき道 石に

子や待ん 餘りそまなみのさああり 秋風

いしりあけ中れ拍子や雉をみお 芭蕉

芭蕉菴のあやしくもさかき道

蓬草小鋸流しあやしくもさかき道 曲水

木尻筋旅しあやしくもさかき道 山店

木尻筋旅しあやしくもさかき道

畫讚

山吹や夕日の焙炉は白く時 芭蕉

白玉の雪あまきらくて梅の肌 車来

あけられた髪けしんぬぬ

しつしとけり

さかえんてん

竹カクイもくろくを昔やちり梅 羽紅

鵜牛おしよてんてんてんてん 坂上氏

津國山本

うつくしの筆やうくも梅の 芭蕉

しらしらしらしらしらしら 伊賀 利男

東叡しよあうぬ

小坊まゆまゆまゆまゆまゆ 其う用

一枝のゆめゆめゆめゆめゆめ 尚白

雛の糸のまゆまゆまゆまゆ 凡兆

まきんまゆまゆまゆまゆまゆ 丈艸

馬羽のまゆまゆまゆまゆまゆ 史邦

中野麻よまゆまゆまゆまゆまゆ 千那

葛城のふもとをさす

れつるやまのゆかりの顔 芭蕉

いこの園花垣のなはらのつら
あはれ乃ハ室極の軒よ階
らささるると云傳へんらん色
我し

一里ハこれ花亭のふ縁や 同

此文の墓東武谷中にも一に
と歳してあれ九年の及み
城よりよりぬ墓のふよ極極
つらう一あひく母おかしこと
つらうこれ極をたつら後らう
他の墓程さうつらつらつら

まうやの吸ふ野の往還 園風

知人よあまうらむありんれ 去来

あま僧の煙り一あのかれ 凡北

浪人のやうく

嵐を帯の夜あれう花靨 半残

野もこれ花中結ゆへ外 伊賀長眉

これの奥もや
うのたはくは

大率やうは奥乃あのみ 曾良

道灌山よのけしき

る滝やまをさうのびをさうのび 嵐闌

源氏の強きかへり

標子に夜らるるあはれまじりし 羽紅

庚午の歳家を結ぶ

綾よりりしきまを花はらりしは 北枝

いしりらるるや伽藍の樞やまじり 凡兆

浦棠はしれと満より夜の月 普船

大和の脚乃しき

草即ちやまをばやあめのみ 芭蕉

しるや躑躅よけは尾のひび 探丸

やうつら海よらんや夕日影 智月

兔角して卯まつちむし跡を時 山川

鷗鳥のおしやうりやうりてあはれ 式之

木曾塚

其まの石しるはなまはる 乙刃

春風夜をよめる御殿の堂然 曾良

望湖水惜春

ゆきまじりよりの色はさきまの 芭蕉

猿蓑集卷之五



去来

鳥の羽を刷ぬまのうらみ我

一鳥をいりぬまの集まのまの 芭蕉

股引の朝のあまのうらみ 允兆

たぬきをよすすの條張のまの 史邦

まのうらみまのうらみまのうらみ 蕉

人よめられす名物乃梨 来

疲骨けすこ起る力なき
 陸をうりて車列こむ
 うまをを積穀垣よりん
 いさや別の力より出す
 せうけよ掃てうらを
 地をい切る飛くひりよ
 青天よ有明月の影け
 湖水の秋乃比良れら
 蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

紫のや蕎麦めすまれ歌をよ
 めうこ若智ぬ月影夕る
 押合て寝くハ又きつうわ
 くられや乃まゝの赤き
 一掃鞆つくる窓の
 枇杷の右をよにまきりん
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来九

芭蕉 九

允兆 九

史邦 九

九兆

市中ハ物のよほら也及此月

あししくこりく乃勢 芭蕉

二番草一取の果よ此種よ等 去来

庚うらうらうらうあ一扱 兆

け筋ハ銀のん志しす早自由に 蕉

たききりーに長き扱指 来

草村は蛙こはりのつまらぬ道
路乃せまらちにけりゆす
道心のむらあはあれたるむ時
能やれ七尾の冬は行くと
魚の骨志りある處の老をそ
待人入へ小舟心の鑑
まらり扇風を倒す女を
湯後六行の筆子傳し

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

苗香たきと吹流すの嵐
傳やとしく寺りくえ
さる引の帳をせとけり様の
年へ一年の地子らるや
五六七とよつらる家三ツタリ儲
足袋少くも黒けりもの
追ふや早よ去る乃刀持
つらら何れ水はほり

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

戸澤子もむらあしの雲を
 えんきしききわいつくさつく
 ころくと草鞋を作る月夜に
 蚤とさしひよ起し一雨秋
 そめまのころりひあたる林蔭
 ゆらみく蓋のあつた草鞋
 草履よ新目く括るあやう
 いのち嬉しき撰集れき

来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉

さよふくふ品うらもを
 は母の果も皆小町ちり
 あにあり粥すも海を
 けらぬらとちりる極愛
 まれし風は信しきあひ
 おもひしあふの森しき

来 蕉 兆 来 蕉 兆

元兆 十二

芭蕉 十二

去来 十二

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 芭蕉, 去来, 野水, 芭蕉, 去来.

灰汁桶のきりぎりす
九兆

あゆみのすくきりぎりす
芭蕉

朝露のあかりたる月
野水

あふてきりぎりす
去来

子代孫のきりぎりす
芭蕉

雪のきりぎりす
兆

すまはるも女は地獄のしるし
何れもしるし根乃ちた
夕月夜星の道ははたはた
人もちたれあそびあは
うそつぎに自慢いそぐ
又もたると此節をた
堤うり田の青やそつぎ
加えたりやう六独と社あり
蕉 兆 来 水 兆 蕉 水 来

物うりた屍をさく名乗す
雨のやうりた女を中一
昼孫より若き路のたはた
志まらなく水よ圃たう
糸橋板いにいよはた
来りま三月曙乃ち
水 来 兆 蕉 水 来

九兆 九

芭蕉 九

野水 九

去来 九

銭乙刃東武行

芭蕉

梅より葉まわりとけ有のさうけ

かさあしりーとそりりの様

乙刃

云云存るのくわ田よ土持比るれ

珍碩

志しきもねよてりよれよる

素男

乃隅よ虫歯くそてるるの月

刃

二階の窓よとれよるあさ

蕉

放やううううた跡はるるのそす
 編の糸迄乃力たきこくせ
 ちうしんたおよこける鏡舞と
 心花頭よと呼みくはくは
 卯の割乃箕ふに並ぬやめ方
 すこきさる木の志のうあかり
 萩のれしうさのれよとあて
 若くしうる百舌るの二勢
 智月 男 碩 蕉 碩 男

懐よるふをよあやむる雄の月
 けきさうさぬあつあつら
 鏡の柄よえすうらゆるふのれ
 灰すささしらすかりあ跡
 喜れ目よはま舞てくる種机
 店屋ゆくよ休のまうかり
 汗ぬらふ端の志うの種糸
 とられせうしき雛乃下
 凡北 易 去来 兆 正秀 来 半残 土芳

大膽よゆきしむらぎのこゝろ
身われぬ汝の取所をこそ
小刀乃捨刃下る細工を
桐よ火とりす大卒の夜
うそよとねよ使も後その厨
しり合合せもあはれ
此よのれぬをこそ破る解
碧油移る世も志は月見
芳 残 園風 猿 残 風 雖

咳の隣はらをも縁つと
海はくまよほもこそらんを顔
形をこそ移るをかりしる金は盃
うすもあはる糸の割下結
花よ又こそうけつものさし
雛の被を色深るこそ
芳 風 嵐 蘭 史 邦 野 水 羽 紅

芭蕉 三

乙卯 五 土芳 三

珠碩 三 園風 三

素男 三 猿錐 二

智月 一 嵐蘭 一

凡兆 二 史邦 一

去来 二 野水 一

正秀 一 羽紅 一

半残 四

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥岩向のうららよ山を
園分山と云うは園分寺の名を
傳ふなりへ一掃屏の細き流を流
るる翠峯殿よ及る中二曲二百歩
に八幡宮ありたは神体
ハ祓禊乃る像とや唯一の家よ

甚急ゆる事とを两部光成和の
利益乃塵を同一うたまたま
又貴一日比を人の諸さりたれハ
いと神さし物さつらある傍よ位
捨一草の戸をさし根を斬
をささるるをり壘を築て狐狸
姉とをさるより幻住と云ある
の僧ありハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父よあん坊り一を今ハ八年并
むしよ成るよよ幻住と云あるを
のこ強りなり又市仲家さる事
十年并計ありてふ十年下らさ
身も養忠のふのを先ハ蝸牛
家を離て真羽家沼の長老と目
下一画をさるる事とあることあり
るさ北海のは荒磯よさる事あり

つく心す先ある町さ谷の清如水を
 汲く自ら炊くくくの水を煮沸く
 一炊の備いしりくくく音信さん命
 けよんくくく信あり一信りてくくく
 る物くくくく一持佛一間を隔て夜
 の物きんじくくくくくくくくく
 くりさふまを籠紫さくくくく信く
 かそくの甲斐信りくく殿子くくく

洛よのほりくくくくくくくくく
 しく額とくくくくくくくくく
 深く幻住菴のくくくくくくく
 草菴の記念をくくくくくくく
 くと旅の後とくくくく器をくくく
 まが木をれ橋を越の愛養く
 枕のとれ極くくくくくくく
 ぬくくくくくくくくくくく

里の住のこた入し事とていの志乃福
らいありー鬼のま知よりあや
家ゆらぬ農談目尻よ山の端よ
うもつた夜屋歸よ月を待つて
新よ付ら神よ取ての園両よ是
をららしきいこいこいこいこい
深敷よぬこ山野よ跡よかきと舞
とらあらやこ痛みよ供てむ

をいしり人よ似より情年月れ
移ら拙き身れ科をよもよ
あゝ海よは官愈命れ地よ
やこいし佛の離祖室の扉よ入
ら舞とせらよあらたよ月を
よあよとせめ花鳥よ情を芳し
暫く生涯のうらわ事とせいあわ
孫よす能きあまよけ一筋よつみ

くも樂天ハ五嶠く神とやりの老杜ハ
瘦より賢愚文質のさうく
さうのつまう幻の柄あさや
みまのけくぬぬ

まのし推れあのるるま

題芭蕉翁國分山

幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景周人
義也間讀芭蕉翁幻住菴
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺

古松鬱兮綠陰清
 茅屋竹榻總數間
 內有佳人獨養生
 滿口錦繡輝山川
 風景依稀入誹城
 此地自古富勝覽
 今日因君尚益榮
 元祿庚午仲殊日 震軒具拜

儿右日記

城を北中へ入る林麻の
 之川を流れ跡志つるや川の
 鶏ももろく鳴る鳥なく
 海へ五月雨のぬやう
 軒らしき名梨の後の
 細腰のやまのやまの
 曲水 野水 去来 元兆 千那 珠碩

贈紙帳

下

下

おもしろ紙地よきなり
野徑

らくまきし露のなまなり
里東

曇花をたふよりのなま
乙羽

顔や薄乃中れ花うら
膳所 怒誰

多やし一帯よも結く
探志

五羽六羽菴らうらうら
元志

本つゝたわくしつゝ水鶏
膳所 泥土

笠あふり帽すしや月の也
史郎

月待や海を鹿目よりし
正秀

志つらさの粟の糸洗し
立人 柳陰

涼こそよめにまうし
如行

訪よ留らあり
膳所

椎のよよしくくも晴
朴水

目下やよはぬ程よ海涼
美濃無井 市隱

文よよふす

後所まや早苗のふりよ涼
半殘

麦乃粒をよまきらす

一袋これや身お田のこころ 麦 之道

書音

一隻入るふさくらや膝のしん 魯町

夕まや梅木の鼻れ一まきり 及肩

昇格挨拶

梅のや田と山はくらきり 尚白

贈箋

志をぬもまゝあゝみのしん 北枝

よ履わく侍よりきり 木節

包紙の書

錦よりすま袋や秋の露 扇

稲のふくれを佛はまはる 智月

石もやけく果下り 羽紅

桶の端やまわてをむす 昌房

里ハくくありとさけあつ 何処

膳所

晴やいづ境よはりのこもる 越人

越人よ向いこ訪合て

筆の交れ信よ飛入菴のれ 等哉

明年弥生尋旧菴

春のあやふしも星よ戸たひつ 嵐蘭

同其

涼のちり居をよ入位持り 曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑磬之首韻也

非比^{スレニ}彼山寺偷衣朝市頂冠笑

只任^{スレニ}心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去来随翁遊学棋館

竹窓躡等凌節斯有歲屬撰^テ此

集玩弄無^レ己自謂絶^{ラク}超^{スレ}狐腋白

裘者也於是四方嗟友憧々往

來或千里寄書々中首有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集錄者索居竄栖為難
通信且有旄倪婦人不琢磨者
廉言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維眈元祿四稔卒未仲安余掛

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席
見需記此支題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾一藁高張有補干詞
海漢人云

風狂野衲

丈牝漢書

正竹書之

京寺町二条上ノ

井筒屋庄若衛板

